

山村才助と西洋史研究

——『西洋雜記』をめぐって——

助野健太郎

Saisuke Yamamura and Early Studies of European History in Japan: A Study of His Book, *Seiyō Zatsuki* _____

Seiyō Zatsuki (Notes on European History), written in 1801 by a warrior of Tsuchiura by the name of Saisuke Yamamura (1770-1807), was the first book written on European history during the period when Christianity was banned from Japan. It gives an account of the creation of the world according to the order stated in the Book of Genesis in the Old Testament, and it considers the year of the birth of Christ as the year of the restoration of Europe, and therefore Christ as the Lord of restoration. These points are significant in that such ideas influenced many scholars that followed and the books written later on this subject all took in these ideas. This paper is a study on how the stories of the Old Testament and the accounts of the life of Christ were already being taught widely through the manner of European history even 60 years before any Christian missionary arrived in Japan after the opening of her country.

一、山村才助以前の西洋史研究

わが国に西洋史学が入ったのは、そう古くはない。わが国で最初の欧式教育を行ったキリシタン学校、即ち一五八一年（天正九年）に始まり、一六一四年（慶長十九年）まであったと思われるわが国における当時のイエズス会教育機関で、歴史が科目として教授された記録はない。因みに、一五八六年（天正十四年）及び一五九九年（慶長四年）に制定され、出版されている『イエズス会学事規則』Ratio atque Institutio Studiorum Societatis Jesu 第五項では、「神話・歴史・その他の（文学以外の）学問に関わるものは、すべて簡単に取り扱うように」と記されている⁽¹⁾。

一五九〇年（天正十八年）イエズス会士サンデ Eduardo de Sande の編によりマカオで出版された『日本遣欧使節対話録』は、使節が欧州の見聞を語ったものであるが、その学科課程の中にも歴史は認められない。

一六一三年（慶長十八年）即ち明末に入華したイタリア人のイエズス会士アレニ（文儒略）Guglielmo Aleni が西欧学芸と学制のことを解説した『西学凡』（一六二三年、元和九年、杭州刊）には、学問を文科・理科・医科・法科・教科・道科の六科に分け、文科を言語・文字の学とし、この中に古賢名訓・各国史書・各種詩文・自撰文章議論等があり、その目的は先ず「文筆を試み後、その議論を試む」ためにあるとしている。議論を試みる法に五端があつて、先ず物を見、事を観、人を観、時勢を観るとしているが、要するに修辞学・弁論法を教えたもので、各国史書の教育も史学としての教科ではなく、人を観、時勢を観るために弁論法の教材として課せられたものである。同著者による『職方外紀』も又、前著と同年に出版されたが、その欧羅巴総説中に記された学校に関する項も又、前著の説く所と同様で、歴史は事実を観るためのもので、哲学を修める前提としている。尚、両書とも一六三〇年（寛永七年）共に禁書となっ

たが(一七二〇年・享保五年解禁)、若干は潜入して流布された形跡もあり、殊に『西学凡』の方は、向井兼美の編した『天学初函大意書』(一七七一、明和八年)や近藤正斎の『好書故事』(一八二六年、文政九年)などによって紹介され、蘭学者から水戸学者に至るまでが所蔵した程であるが、勿論当時の史学思想を動かすというようなことはなかった。⁽²⁾

次いで、宗門奉行井上筑後守政重が転び伴天連ジュセッペ・キアラ Giuseppe Chiara 即ち岡本三右衛門を取調べた記録を主とする『契利斯督記』(アメリカ議会図書館本)の下巻には三右衛門が一六七五年(延宝三年)署名提出した「品々之学文之事」と云う文書が写収されているが、その二十からある学問のうちにも歴史学は記載されていない。

その後、一七〇八年(宝永五年)鎖国下の日本に単身渡来して捕われたイタリア人宣教師ヨハン・バッティスタ・シドッティ Juan Battista Sidotti を新井白石が取調べた時の手控えと見られる『ヨハンバッティスタ物語』と云う写本(一七〇九年、宝永六年)にも、シドッティの言として、神学関係を主とした十六科目の名が挙がっているが、史学はない。只、教会史と云う一科が出ているが、これは歴史神学であって、神学の補助学に過ぎない。その後、六年程して、一七一五年(正徳五年)有名な『西洋紀聞』が出たが、これは全く、先の「物語」を草稿としたもので、勿論、史学の名は出て来ない。

又、一五九〇年(天正十八年)に始まり、一六一四年に終わったわが国におけるイエズス会の出版物(キリシタン版・耶蘇会版)においても、西洋史に関する出版の形跡は認められない。

故に西洋史学については、日本人のおぼろげな智識ですら、十九世紀を待たねばならなかった。その間、寛永末年から幕末に至るまで、鎖国の窓と云われた長崎出島に入って来た『阿蘭陀風説書』と云う甲比丹の齋らす西洋のニュースが、西洋近世の史料となり得たであろうが、これとても一般の眼にはふれず、府庫の奥深くにかくまわれていたに過ぎない。

二、山村才助の業績

山村才助がわが国における西洋史研究の始祖であることは、既に先学泰斗の認めるところである。⁽³⁾才助、名は昌永、字は子明、号は夢遊道人、一七七〇年(明和七年)土浦藩士・百五十石取・山村昌茂の長男として、江戸深川の藩邸に生れた。彼の自著『訂正 采覧異言』の凡例の中に、「昌永、幼より輿地記載の書を好む」と記しているから、幼少時代から地理に興味を抱いていたものであろう。中にも彼が好んで読んだ地理書の中に、新井白石の『采覧異言』があったと云う。⁽⁴⁾若くして蘭学を志し、叔父の儒者市河寛斎の紹介で、杉田玄白に面会したが、玄白は既に五十七歳の老年に達し、後事を門人の大槻玄沢に任せていたので、才助を玄沢に託した。⁽⁵⁾そこで彼は玄沢の蘭学塾芝蘭堂に入門した。時に一七八九年(寛政元年)才助十九歳の時であった。⁽⁶⁾

以来玄沢の下で、一八〇七年(文化四年)三十八歳の若さを以て病歿するまで、彼は蘭学に生涯をかけた。そもそもわが国の蘭学が多くは医者たちの間で育ち、主に解剖学や医学を中心として、天文・地理・動物・植物及び物理・化学に関するものであったが、彼のみは一介の地方武士から出て、本邦最初の世界地理学者及び西洋史家としての道を歩んだことは、特筆に値する。

我々は彼の短い生涯の中で、いか程の著述、業績があったか、その悉くを知ることが出来ないが、知れる範囲特に現存するものだけでも、次の如く挙げることが出来る。⁽⁷⁾

外紀西語考

(享) 一卷二冊

一七九六年(寛政八年)

訂正四十二国人物図説

(貞)

一八〇一年(享和元年)

- | | | |
|--------------|-----------|----------------|
| 読嶋蘭新訳地球全図 | (自) | 一八〇二年(享和元年) |
| 西洋雑記 | (写)六卷一冊 | 同 |
| 六費弁誤 | (自) | 同 |
| 訂正 采覧異言 | (写)一二卷 | 一八〇三年(享和三年) |
| 大西要録 | (自) | 同 |
| 新 東西紀游 | (写)四卷二冊現存 | ※一八〇四年(文化元年) |
| 訂正増訳采覧異言の世界図 | | 同 |
| 魯西亜国志 | (写)六卷六冊 | ※一八〇六年(文化三年) |
| 魯西亜国志世紀 | (写)二卷二冊 | ※ 同 |
| 亜細亜諸島志 | (写)二卷二冊 | ※ 同 |
| 華夷一覽図説 | (写)一卷一冊 | ※ 同 |
| 華夷一覽図 | 四四・五×六三・五 | 同 |
| 印度志 | (写)二卷二冊 | 一八〇七年(文化四年) |
| 地学 初問 坤輿約説 | (写)一卷一冊 | 同 |
| 百見西亜志 | (写)一卷一冊 | 同 |
| 西洋雑記 | (刊)四卷四冊 | 一八四八年(嘉永元年) |
| | | 一八六六年(慶応二年) 重刻 |

この他に、『西洋雑記二篇』と称する続篇らしきものが二卷一冊の稿本として、大槻家に伝わっている。この本は

前の『西洋雜記』が書かれたであろう一八〇一年(享和元年)⁽⁹⁾より程遠からぬ一八〇三年(享和三年)か、その翌年(文化元年)頃の筆とされている⁽¹⁰⁾。

その他、渡辺華山や箕作阮甫が旧蔵した『西洋雜記』写本(圖書院蔵)の卷六末尾には、「夢遊秘書」と題する才助の著述目録がついているが、それには、右の他に目下所在不明の八点が記載されており、しかも同写本は「夢遊漫筆」第二十一より第二十六に当ることが、各巻のはじめに明記されている。既に享和の初年、才助三十三歳にして少くとも二十六巻以上の著書があったことが窺われる。故に現存する彼の著述はその全業績の何分の一に当るか計り知れないのである。

彼が幼少から逸材であったことは、彼にまつわる幾つかの逸話がそれを示している。幼弱の頃、藩邸に出入の時、好んで庭前の柳の葉を集め、これを並べて文字の形を作ったとか、六歳にして父の与えた紙寫に「大学章句序」の全文を書き写したとか、十七歳の時に早くも叔父寛齋の編に成る『日本詩記』十二卷三冊を校訂したとか、美談に等しいことが出て来るが、師の玄沢ですら、彼を評して「夙に群籍に耽り、純ら大地・渾興の学に志す」と記し、「余をして易東の嘆を發せしむること、それ、この人にあるか」と嘆じている。⁽¹¹⁾ 実に才助の秀逸さは、玄沢をして、正に日の出る所を変えるのではあるまいかと感嘆させたのである。更にその研究の態度は、更に師をして「熟読・暗誦・鑽研倦まず、疾風雷雨、咫尺愁うべしといえども、勇進・敢往・幾ど虚月無し」と云わしめる程であった。⁽¹²⁾ かくて彼は玄沢の門下百余人中であって、四天王の一人と称せられるに至った。⁽¹³⁾

しかし、一八〇七年(文化四年)彼は三十八歳の若さで歿した。『百見西亜志』が最後の絶筆となった。玄沢の門に入って以来十八年、師をして「天下ただ余茂質あることを知りて、他を顧みるの意無し」と書かした程、彼は玄沢を敬い、慕って止まなかった。⁽¹³⁾ 彼が死んだ時、その玄沢は未だ五十一歳で元氣だった。彼が最初に入門を志した蘭学

の始祖杉田玄白翁も、七十五歳で健在だった。それから八年も経って出された『蘭学事始』の中で、翁は彼をして「天性其才備り」と評し、彼の死を「惜むべし」と悼んだのであった。⁽¹⁴⁾

三、『西洋雜記』の成立

才助がわが国における西洋史学の始祖と云われる故は、一八〇一年(享和元年)彼が三十二歳の時執筆し、その死後四十一年した一八四八年(嘉永元年)江戸の文苑閣より夢遊道人の名で上梓された『西洋雜記』四卷四冊あるを以てされる。

本書執筆の由来は、卷一の初めに著者自身が次の如く記している。

予、近年、志を西洋の学に興し、磬水先生に従事して、その読書・訳文の法を習ふ。既にして、先生に侍するの間、或ひは、その語路・文義を聞き、或ひは、その彼邦俗・事情を問ひ、彼書を閲すること、問々記説を得ることあれば、すなはち、これを懐中の小紙に録せしもの、爾後歲月を経るに随つて、筐笥中に充盈す。これによりて、頃日これを淨写して、その読書・文義・語路に係る者は一編となし、以て、彼邦書を読む時の考証に備へ、ここには、その紀事・奇談・雑技・物産等を配し、名づけて西洋雜記といふ

これによると、執筆の動機は、芝蘭堂に入門以来、師玄沢について学ぶうちに書溜めた備忘を整理して一書をなした十二年に及ぶ研究生活の賜物であつて、その内容は「紀事・奇談・雑技・物産」とあるが、その中の「紀事」と云うのが、西洋史に当るもので、四卷中その第一巻を占めている。

四、『西洋雜記』の素材

才助は一七九六年(寛政八年)二十七歳の時に『外紀西語考』と云う本を書いた。芝蘭堂入門八年にして出来た恐らく処女作であろう。内容は書名の如く、既出アレニの地理書『職方外紀』⁽¹⁵⁾五巻に出てゐる西語の漢字をオランダ語やラテン語の原語に当てて、考証したものである。

更に彼はその行間にしばしば利瑪竇 Matteo Ricci の『坤輿万国全図』を用い、後にこれを『訂正 采覧異言』にも引用した⁽¹⁶⁾。

才助は『西洋雜記』の完稿に先立つ三ヵ月前、即ち享和元年五月、師玄沢の依頼で、『訂正四十二国人物図説』を書いた。これは、西川如見が八十年程以前即ち一七二〇年(享保五年)に出版した『四十二国人物図説』を訂正増補したもので、『西図』や「明の時の利・艾二氏の万国図を閲し」ながら、如見の解説を全面的に改正した。即ち、この時も、リッチの『坤輿万国全図』やアレニの『職方外紀』を参考に用いたことが判る。本書は、才助の執筆後五十二年も経った一八五三年(嘉永六年)永田南溪によって『海外人物輯』(二巻)の名で公刊された。そして、才助はいよいよその年の八月『西洋雜記』四巻を書き上げたのである。

これに前後して、才助は『訂正 采覧異言』の執筆を進めていた。大槻玄沢の序文があるが、その紀年によれば、享和壬戌とあるから、一八〇二年(享和二年)の脱稿と見てよい。実に『雜記』完稿の翌年である⁽¹⁷⁾。従つて、彼の『雜記』と『異言』は平行して執筆されていた訳で、相互に関連があり、『雜記』はむしろ彼の雄著『異言』執筆の過程に生れた副産物とも見られている。故に彼の『異言』について少しく記さねばならない。

『訂正 采覧異言』とは、新井白石が一七一三年（正徳三年）に書いたと云われる『采覧異言』（写）五卷を訂正、更に増補したもので、十二卷六冊より成り、序・凡例・引川書目・目錄に次いで白石の『采覧異言』の序と凡例と總叙及びその考証を加え、その後には地圖を添えたものである。『采覧異言』の書名は周・秦の時代に勅使が万国を巡って異言を集めたと云う故事によつたもので、「万国異聞集考」とでも云うべきか、要するに世界地誌である。

その成立について、才助は次の如く記している。

宝永中に（一七〇九年）白石源公、明旨を奉じて遼馬の人（ツチ）に接し、爾後正徳年間來貢の和蘭人に逢ひて、官庫

従來所蔵の和蘭のヨハンブラア（Johan Brae）といふ人、撰する所の輿地全図を以てこれに示してその方俗を問

ひ、私録する所あり。最後、明の万曆中に（一六〇三年）所刊の万国全図（リッパの地）を訂正して、采覧異言を撰すと

いふ。その該博・典実、遠く明図の比にあらず。しかれども惜しいかな、四大洲中、有名の大国、なほ遺漏する

こと少なからず。或ひは、ただ、その方鏡所在を記すのみにして、その国事に及ばざるものあり。これ当時、ロ

ーマの人（ツチ）、その国の記せる和蘭の文辞に通ぜず。公（臣）もまた異方殊言を解せずして、全く伝訳することを

得ず。かつ對話の和蘭人（ヨルダイン）は使期促迫なれば、まだ詳にその説を告ぐるの暇なきのみ。むべなり。そ

の精審を得ざること。しかれども公の学識卓絶にして、倭漢古今の事実を詳究するの余り、はるかに海外の事に

及ぶ。その宏量遠大にして、広く訪ひ、遠く求むるの懇到なるにあらずんば、当時にして、何ぞこの撰あらんや。

昌永、幼より輿地記載の書を好む。かつて異言を読み、その諸説の宏博にして、聞を新たにすること多きを感じ

ず。ただその記事、いまだ備はざることを惜む。かつ、この書開彫刊本なく、数数伝写を経て、魚魯亥豕の誤ま

た多し。つねにこれを校正増補するの心あり。故に数本を得て、これを校定し、その文義においては、やや、そ

の訛字を訂正すといへども、西語においては彼此紛紛として、そのいずれか是なることを知らず。爾後西学に志

を興す。かつて磐水先生、和蘭の学に耽るときき、倒履してその門に入り、先生に従事してその学を習ひ、年を積で、やや彼邦の書の門墻を窺ふことを得たり。是に因つて、諸の西書に因つて異言載する所を校考し、つひに私説をなして、これをその下に記し、また彼邦所刊のゼエ・アトラス (Zee-Atlas)⁽¹⁸⁾、ノールアント・トルン (Koeranten van)⁽¹⁹⁾ 二書載する所の略説を訳して、各国の下に附し、また天明中(一七八六年)に月地桂川君かのはゆる官庫所蔵の西図(ヨハン・ブラウの地球図)の傍に載する各地略説の訳言あり。これ磐水先生も校正に与るといふ。予もまたその書を得て、これと参勘し、その他諸書見るに随つて、考鏡するに足るものあれば、またこれも次に附訳し、つひに十二卷を成し、これに冠しむるに訂正増訳を以てす

実に才助はこの本の執筆に全精力を傾け、文字通り没頭したと見ていい。彼がこの本のために引用参考とした内外文献の数は実に百二十六種にも及んだと明記している。内訳は西籍三十二、漢籍四十一、和書五十三から成っているが、西籍の中にはドイツ書、ロシア書も各一を含み、漢籍の中には多くの禁書もあり、和書はほとんど当時までに訳された蘭学書であった。

ここに当時としては可能な限りの書物を駆使して、単なる地理書にとどまらず、人文・歴史の記述をも加えた画期的集大成を見事に完成した。更に芝蘭塾入門十三年、家庭生活をも犠牲にして研究に捧げた彼の努力の結果であった。師玄沢はその成果を称讃して、序文を寄せ、次の如く云っている。

その説、精詳・明備・増統・重訂の功、白石先生いまだよくこれを尽す能はざるところを尽す。地海坤輿方域の至大、四方万国地形の広袤、国俗の情態、政治の得失、人類の強弱、物産の恠異模蘇、牽連周悉その極に至る。人をして戸牖を出ずして大虚の觀を為し、膝を奥突に擁して、遊仙の懷を生ぜしむ

かの稀世の碩学と云われた白石が名著『采覧異言』を著してから、九十年程して才助はこれを見事に訂正増補し

て、白石の誤謬を正し、不足を満たし、わが国の世界地理学に当時の一大金字塔を打ち建てたのであった。

実に処女作『外紀西語考』から始まって、『訂正采覧異言』に至る彼の道程は又『西洋雜記』を生む過程でもあったと云えよう。

五、『西洋雜記』の特質

『西洋雜記』四卷四冊は彼の多くの著述の中で、公刊された唯一のものであった。そして後に一八六六年（慶応二年）にも重刻されて、最も多く人の目にとまったものであった。その内容は、「世界開關の説」から始まる西洋歴史や世界地理上の珍談・奇談がならんだものであった。そのうち、西洋歴史に当るものは、全四巻のうち第一卷（第一冊）にあつて、歴史の始まりを『旧約聖書』の「創世記」に当る神話から筆を起し、次いでバビロニア・ペルシア・ギリシア・ローマに至る古代史の説話を並べている。その目次に次の如くある。

世界開關の説、洪水井聖人諾扈の説、バビロニア龍鼻爾の高台の説、西洋古今四大君の説、バビロニア龍鼻落爾亜井百兒西亞の二大君
 伝統の説、エジプト邏馬国大君の説、西洋中興革命の説井諸国年号の説、ヘブレウスの少年火中に入て焼ける説、天よりソト瑣奪馬国の焼く説井瑣奪馬の異集の説井西洋諸国男色を禁ずる説、エトピア茅索祿斯王のエトピア箠陵の説、アレキサンデル大王諸將に宝物を賜り説井エトピア乞兒に千金を施す説、君を弑する逆賊雷霆に撃たるる説、カール・ゴロート帝邪魔の祠を毀つ説、エトピア邏馬国銅甲の説

更に第二卷の冒頭に「キリスト聖人美瑟の説」と云う旧約の十戒で有名な聖人モーゼの話が載っている。

今その最初の一節を掲げれば、「世界開關の説」として、

大古の世に、造物主すでに天地を造成してのち、人の始祖男女二人を造りて、これを「バラデキス」の地に置く、其所居を号して「エデン」といふ、

按に、「バラデキス」は楽界といへる義なり、奇器図説に、地常良和之処といふ、是なり、また西書を按に、「バラデキス」の地は、今の亜爾墨尼亞国、帝昴爾伯折国、欧法臘得河「チギリス」河「ダウロス」山等の間なりと、「ヘブレウス」の語大古一種の方言にて「ハルデス」といひ、「ギリキス」国の語にては「バラデキソス」といふとなり、

其男を亜当といひ、女を厄襪といふ、

一にいはいはく、造物主天地を造成してのちに、二塊の土を搏成して、此二人の形を造り、万民の始祖となす、これ人死すれば元の土に復るの義を明かにせるものなりと、是は今の神道者と称するものども、強（シヒ）て己か私意を以て上古の事へ理を附会するに同くして、此説最怪誕なるべし、

其地すべて氣候融和にして、人疾病なく、又憂苦なし、天またこれがために水流の派を分ちて、四の大河となして、美魚多く、

これ今の安日河、「チギリス」河、印度河、一名「セウワフット」欧法臘得河の四なりと、しかれば其「ハラデイス」の地、今の東印度の地に及べるにや、また地理の書に、印度の南海、則意蘭島の中に、「アダムスバンク」と云地あり、相伝ふ是古亜当居りし所の地なりと、皆詳ならず、

また清蔭美景ありて、人をして憩息をしむるに宜く、其他五穀百菓美味の物、みな天地自然に生成して、絶て人力を勞せず、鳥獸と群を同うすといへども鳥獸みな人の命を聴て、敢て人に害をなすことなし、然るに年を歴て、邪魔虚を伺ひて、慢心漸生じ、

一にいはいはく、其つねに憩息する所の、一箇の大樹の上のつて一蛇の廻繞するを見る、あへて意となさず、

此蛇は乃、邪魔の変化せるものにして、其虚を伺ひて、驕慢の心を生ぜしむといふ、

厄褌が言に因て、巫当もまた天の教戒をそむきて、共に罪を造物主に得たり、これよりして地気更変して、五穀生じがたく、鳥獸害をなし、生者病死飢寒の患を免れず、男子には其耕田の労苦を罰し、女子にはその生育の艱辛を罰す、是において、巫当自耕田の器を造りて、その衣食をいとなみ、始めて火食を知る、また木を伐りて屋を造り、以て寒暑を避く、厄褌生む所の子多き中に、其第一子をカインといひ第二子をアベルといふ、此二人の世にいたりて、始めて城邑を建て居れり、カインは国王の始となりて、政化を施し、人類次第に蕃息す、此時人寿みな長し、数百歳を保つ者少からず、

一にいはく、巫当はその寿九百三拾歳なりと、

これより以後の事体を、四つに分ち、「ゴウト」「シルヘル」「コーベル」「エイゼル」の四「テイド」と号す、「ド」は時代又時これ金銀銅鎮の四に配して、時代を分ちたる者にして、人間日用の諸器財乃至樂器の類までも多くは此時鉄

代の内に造成せりといふ、

以上冗長をも顧みず、第一節の全文を掲げたのであるが、右は大体旧約聖書「創世記」の初章に筋を追って記述してあることは既に承知の通りで、その文の簡にして要を得、誠に美辞快調なことは、本書の全文を貫く特色の一つでもある。尚文間に在る考註は、今日の知識を以てしては若干の違誤矛盾を逃れないが、強いて学問的考証に努力をしている点は認むべく、また文末にある文化年代については、これ迄一般にはわが長崎の出島蘭館に來留したドイツ人シーボルトの著『日本』(一八三二年・天保三年刊)所載の考古学的記事を以て最初の如くされて来たが、本書はシーボルトの來朝した一八二三年(文政六年)に先立つ一八〇一年(享和元年)既に、今日云う石器、銅器、鉄器の文化發展段階を暗示する記事を著しているのは、わが考古学研究史上にも注目すべきことであろう。

次いで本書は「洪水并聖人^{ノア}ノ説」、「罷鼻爾^{ノア}の高台の説」等旧約の説話を略述しているが、かのモーゼについても彼の伝記やその奇蹟を述べ、次いで十戒に關し、「美瑟^{モイセ}が撰するところの、典札法制の書、および上古の歴代史記等、皆今の世に伝はりて、諸国の規模とす」と表現している。

更にキリスト降誕については「西洋中興革命の説 # 諸国年号の説」として次の如く記している。

西洋開基^{キリスト}より今^{キリスト}迄辛酉の歳に至るまで、凡五千七百四十八年なり、然れども開基より第三千九百四十七年に當りて、一聖主世に降誕す、此王神靈聖徳ありて、諸國に教を施し、文運大に開け、制度全く備るを以て、遂に其聖主誕生の次年を以て、中興革命の元年と稱し、西洋諸國皆其正朔を奉じて、別に年号を建てることなく、今^{キリスト}迄辛酉に至りて中興革命の第一千八百零一年なり

としてゐる。ここで特に興味をひかれることは、彼がキリストの降誕を以て、「西洋中興革命」と名付けてゐることであつて、かかる呼称は在来西洋にも見当らず、全く彼の創作による命名であると思えるが、キリストの降誕が偶然にも辛酉の年に當るところから、ここにかの「辛酉革命説」を取り入れ、「文運大に開け、制度全く備る」は革命の結果によるものと見なし、キリストをして大革命者と見たのは一卓見でもあらう。

さて、本書に収められた聖書に基く各種の記事は、勿論宗教的意味からではなく、西洋古代史として記述されたものであるにせよ、当時世界地理学の發達による西洋知識の増大普及に伴ない、西洋史及びキリスト教に關する知識も増大し、世界に關心を持つ経世家、蘭学者にしてキリスト教關係書を秘かに持たぬ者はないと云うまでに至り、さしもの切支丹邪宗門觀も彼らの間においてはようやく薄れ行きつゝあつた折柄、本書も亦そうした時代の反映として、著者の蘭学研究に付随して現れた禁教下におけるキリスト教のこぼれ種なのである。そして、従来はこれらの創造説話でさえ、キリスト教々義の根本をなすものと考えられ、攻撃論難の的となり、幕末開國後と雖も仏僧らの最も反駁

する処であったにもかゝらず、かえって鎖国の禁教下であつて、洋学の正統として黙過されていたのは寧ろ奇とすべきである。

六、『西洋雜記』の影響

『西洋雜記』に見られた旧約神話を歴史の始まりとする筆法は、既に当時平行して執筆を進められていた才助自身の『増訂采覧異言』において見られた。即ち、その第一卷は文献目録や地図集で、その第二卷から本文に入り、先ず各国語について述べ、次いでジュデア(ユダヤ)について記し、そこでノアの洪水、バベルの高台、バラデイスのことを述べ、ロマア(ローマ)に至つて西洋中興革命を説き、次いで教化王(教皇)のことやハチカアン(ヴァチカン)の宮殿、大書堂(図書館)のことに及んでいる。

就中、キリスト降誕を辛酉の年、即ち革命の年とする筆法は、遠く白石の『西洋紀聞』下巻にも見られた。

エイズス生れしは、是歳乙丑の年を去ること、一千七百九年前の十二月廿五日の夜半なりといふ。さらば本朝、人皇第十代崇神天皇三十年、辛酉の歳にて、漢、平帝元始元年に当れり。⁽²⁰⁾

更に西洋紀元が一聖主に始まると云う筆法は、才助の師玄沢も既に一七九五年(寛政七年)『蘭説弁正』において次の如く書いている。

今「エウロッパ」諸国ノ中興ニ某ト云フ聖主アリテ新ニ政教ヲ興立ス。其主ノ降誕ノ歳ヨリ年歴ヲ推スルニ即チ今年寛政七年乙卯千七百九十五年ニ当ル。則其主降誕ノ歳ハ我朝垂仁天皇三十年漢土ハ前漢ノ平帝元始元年ニ当

同じく『盤水漫草』に所収されている『分撥蛤拉貼斯伝』には、「歐羅巴洲革命大祖紀年以來」とある。⁽²¹⁾

かくてわが山村才助は先学新井白石や恩師大槻玄沢の著述に教えられながら、よりすぐれたものを目指して、『西洋採覧異言』の執筆を進めるうち、そこに示された人類の創造から西洋中興革命に至るキリスト教的記述を『西洋雜記』第一巻において踏襲し、より詳細に再現し、わが国最初の福音史観とも云うべきものを確立したのである。而して、それは彼に続く以後の西洋史書に多大の影響を与え、幕末における西洋史学の始祖としての地位を得たのであった。

尊敬する大久保利謙先生の御研究によると、才助の『西洋雜記』以後、明治維新までに至る西洋通史の著作類は次の如くある。⁽²²⁾

佐藤信淵	西洋列国史略	(写)二卷	一八〇八年(文化五年)序
宇田川榕菴	西洋紀年稿	(自)二冊	※一八三八年(天保九年)
無是公子	洋外通覽	(刊)三卷三冊	一八四八年(弘化五年)序
長山樗園	西洋小史	(写)三卷	一八四八年(嘉永元年)序
安積良斎	洋外紀略	(写)三卷	同
箕作阮甫(訳)	泰西大事策	(自)七冊	同 起訳
斎藤竹堂	蕃史	(写)二卷	一八五一年(嘉永四年)序
幡泥故人(訳)	西史略	(写)三卷	同 起訳
箕作阮甫(訳)	極西史影	(自)五冊	※一八五四年(嘉永七年)
大槻恒輔	遠西紀略	(刊)四卷二冊	一八五五年(安政二年)序

魁山無懷子(訳)

倭蘭年表

(刊)二卷

一八五五年(安政二年)序

箕作阮甫(訳)

大西史影

(自)一冊

一八五六年(安政三年)序

神田孝平(訳)

通史略

箕作阮甫(訳)

古今史略

(自)一冊

手塚律蔵(訳)

泰西史略

(刊)三卷三冊

一八五八年(安政五年)序

箕作阮甫(訳)

大西古史紀年

(自)一冊

一八六三年(文久三年)起訳

西村茂樹(訳)

万国史略

(刊)十一冊

一八六七年(慶応三年)訳出

一八六九年(明治二年)刊行

柳川春三

西洋王代一覽

〔年表〕

清宮秀堅

新撰年表

一八五四年(安政元年)序

『西洋列国史略』

才助が『西洋雜記』を著してから八年後、つまり才助が歿した翌一八〇八年(文化五年)佐藤信淵(一七六八年・明和五年—一八五〇年・嘉永三年)は、『西洋列国史略』上下二巻を著した。その由来については、彼はその巻頭の叙言において次の如く記した。

文化戊辰の年、予集堂氏に陪して阿州徳島府に在り、集堂氏深く予が著説を嗜を知て、日夜予に間に西洋の事実を以てす。予曾て槐園の宇田川玄隨先生に従学し、且亡友山村昌永氏と遊で西洋諸史の所載を聞けり、於是西

洋開闢より洪水及び四大君沿革の事略と、其他四大洲中の帝者及び自立諸王国の小伝と諸国海船の所至と、交易の所通とを筆記して上下二冊の書となし、西洋列国史略と題し、以て是に贈る。蓋し国家の利益を興すは海船通商より大なるはなし、斯編や瑣爾たる小冊なりといへども、悉く世界の機変、当世の要務を載す、希くは心力を眼目に用て軽々しく看過する事なくんば則予が志願也と云。

信淵は本書の上巻において西洋の通史を記しているが、その筆法は既載の彼の叙言にもある様に、世界の開闢より書き起してアダム・イブの話からノアの洪水を記し、次いでバビロニア、ペルシア、ギリシア、ローマ等に至る古代史を述べている。その記述はほとんど才助の『西洋雜記』巻一中にある「世界開闢の說」から「西洋中興革命の說」諸国年号の說」に至るまでをとったもので、文章もそっくりで全く剽竊に等しいと云う他はない。かくて彼は「右西洋開闢以来洪水及四大帝王沿革の大略なり」としめて、次に「是より又四大洲の中の近來の自立諸国の略伝を記して、大夫のために今の世界の大概を説かんと欲す」として各国志に及んでゐる。この部分の底本となつたのは、福知山藩主朽木昌綱（一七五〇年・寛延三年—一八〇二年・享和二年）が一七八九年（寛政元年）に著した『泰西輿地図說』一七卷六冊⁽²⁴⁾や、前野良沢（一七二三年・享保八年—一八〇三年・享和三年）が一七九三年（寛政五年）に訳出した『魯西亜本紀』二巻及び才助の『訂正 采覧異言』等によつたものとされている。下巻はその端書にある通り、「昔時より蕃人の大洋に航し、万国に通津せし其始末を記して、以て航海通商は国家の要務なるを示し、且伊斯把爾亜、波爾杜瓦爾、魯西亜、^{アンゲリア}、^{アンゲリア}等の諸国近來事業の広大なるを詳にして今の世界の古の事体に非ざるを説くもの」であつて、その末文によると、「皆先師宇田川槐園先生に聞ける所なり」としているが、その所説は全く才助の『西洋雜記二篇』卷之一の最後の章「西洋昔時より航海をなして其國を富す説」を踏襲したもので、信淵の下巻は明らかに才助のものを底本としたことが明白である。

尚、信淵の本書には「防海策」と云うのが附録されているが、その中に瓜哇・渤泥等の南海諸島にある疾病を論じて、「亡友山村昌永氏と談して、先年、波爾杜瓦爾より亞墨利加洲の伯西兒国を開きし書を主とし、増加うに先師宇田川玄隨先生の東西病考を以てし、その病源および治療の方法を明弁し、書を著して、その変を詳にせり」と書いている。しかし、その「伯西兒国を開きし書」とあるのは、才助の『新東西紀游』巻一、伯西兒の項を指したものである。

『洋外通覽』

一八四八年（弘化五年）天地人三冊を以て刊行された木活字版の本書は、無是公子の著とあるのみで、その人を知らない。筆禍を恐れて敢えて匿名としたものと思われ、発刊書肆も記されていないところを見ると秘密裡の出版かも知れぬ。内容は、太古より一八四〇年（天保十一年）に至る編年体の西洋通史で、古代史の部分は、太古・新世界・革命の三部から成り、大体が才助の『西洋雜記』や信淵の『西洋列国史略』を素材にしている。革命以後については各国別の形式をとらず、純然たる編年体を用いていることが、わが国西洋史書の新機軸と云えよう。

『西洋小史』

一八四八年（嘉永元年）の自序と翌年の東条耕（琴台）の序があるところより見て、その頃のものであろう。江戸の儒学者長山貫（枊園）の三卷より成る未刊本であるが、その内容は、第一巻が太古より一四五三年東ローマ帝国の滅亡までを記し、第二巻はトルコの勃興から筆を起し、フランス革命よりナポレオン戦争を経て、一八四〇年ナポレオンの柩が皇帝の礼を以てバリーに埋葬されるまでを編年体に述べ、第三巻は歐洲の海外発展と通商發達史を叙したも

のである。特に第一巻については、その例言にも「西洋開基四大帝王ノ伝、西洋全史既ニ詳ニ具ス、近時山村氏著ス西洋雜記ニ其要ヲ挙グ、故ニ四大ノ事蹟ニ於テ雜記中ニ具スルモノハ最モ其略ヲ記ス」とある通り、太古よりバビロン・ペルシア・ギリシア・ローマ・革命までは、『西洋雜記』によって、それを簡略化したものである。

尚、第二巻は『洋外通覽』、第三巻は『西洋列国史略』の影響を受けている点、三書を合成した小史とも云えるであらう。

『蕃史』

一八五一年（嘉永四年）の昌谷碩の序と著者の例言を附した上下二巻の漢文体未刊書である。⁽²⁵⁾ 著者は茫洋子と署しているが、仙台藩の儒者斎藤竹堂で、本書執筆の翌年、三十八歳で歿している。内容は先の『洋外通覽』同様、古代史の部分は太古・新世界・革命の三つに分ち、紀元後はやはり三〇三年公斯璫低奴摸帝の旧業恢復より編年体で記し、一八四〇年那波列翁の改葬で終っている。『洋外通覽』と文章の一致が見られるところから、その漢訳版とも云われ、あるいは『洋外通覽』の「無是公子」なる著者は、竹堂その人ではあるまいかとさええ⁽²⁶⁾ されている。

『遠西紀略』

一八五五年（安政二年）の刊で、仙台藩の儒者大槻恒輔（西磐）の著になる二冊本であるが、執筆は刊行の年より数年前に成ったとある。漢文体であり、儒者の手に成った点、『蕃史』と同系統に属するとされて⁽²⁷⁾ いる。内容は、帝国紀・王国紀・各国帝王伝・各国名将伝の四部より成り、その叙述は既述の諸書と大差ない。所々に「論曰」として、論發風のもの⁽²⁸⁾ が挿記されているのも、『蕃史』の踏襲である。

結 び

以上才助の『西洋雜記』の系統を追って、その影響を辿って見たが、顧るに、多くの著作を遺した才助にとって唯一の刊行書となった『西洋雜記』は、いみじくもわが国における最初の「西洋史書」となった。次いで、佐藤信淵は才助の著作を大いにとつて、『西洋列国史略』と銘打つわが国最初の「西洋列国史」をまとめた。その後、斎藤竹堂とおぼしき無是公子は、才助と信淵の著作を素材にして、わが国最初の編年体西洋史書『洋外通覽』を成就した。更に、長山樗園は才助・信淵・竹堂の業績を以て、『西洋小史』を書き上げ、斎藤竹堂は先の『洋外通覽』を漢訳したと見られる『蕃史』を著し、初の漢文体西洋史書が生れた。そして、その影響は大槻西磐の『遠西紀略』にまで及んだ。

十九世紀の初頭、才助がわが国の史海に投じた『西洋雜記』の一石は、その後半世紀にわたり、蘭学者・儒学者の間にかくも不少の影響を与え、しかもそれらの碩学たちが何れもキリスト教そのものを否定しながら、知識面において才助の影響を受け、その西洋史書の執筆に当り、何れも、西洋古代史をアダム・イブより説き起し、キリストを西洋中興革命の聖主としたことは注目すべきである。禁教・禁書の世にあって、西洋史の名において著述された聖書の記事が、白昼公然と版に附され、読む人の蒙を啓くに役立っていたことは、キリスト教の復活を間近く控えたわが国思想界の下地的役割を果すものであったとも云えよう。

注

- (1) ニコラス・ルーメル氏「イニエズス会の学習体系とその教育哲学」(上智大学編『大学とヒューマニズム』一二五頁)

(2) 大久保利謙氏著『日本近代史学史』一〇五頁

海老沢有道氏「日本文化史上の天主教学統」(上智大学編、前掲書二二三頁)

(3) 大久保氏は「幕末の西洋史研究の先駆者として新井白石と共に山村才助を挙げたい」と記され、(同氏著前掲書一二七頁) 鮎沢信太郎氏は「日本における西洋史学を創始した」と記され、(同氏著『山村才助』二五四頁) 海老沢有道氏は「西洋史学の鼻祖」と記しておられる。(同氏著『南蛮学統の研究』三二九頁)

(4) 山村昌永『訂正増訳采覧異言』凡例による。

(5) 杉田玄白『蘭学事始』下巻による。

(6) 山村昌永前掲書大槻玄沢筆の序文による。但し、『新撰洋学年表』は一七九〇年(寛政二年)才助二十歳の時としている。

(7) 開国百年記念文化事業会編『鎖国時代日本人の海外智識』巻末の文献年表及び大久保氏前掲書一三四頁、鮎沢氏前掲書八九、一〇九頁によった。(年代の※印を付せしものは、鮎沢・大久保両氏が研究に基づいて推定されたものである。尚、写は写本、自は自筆、刊は刊本の略である。)

(8) 『西洋雜記』卷二にある昌永自身の序文には、「享和改元秋八月朔日」とある。

(9) 鮎沢氏前掲書一〇八頁

(10) 『日本詩記』卷一には「上毛河世寧子静齋編、武蔵山昌永子明同校」とある。河世寧とは市河寛斎のことであり、山昌永は山村昌永つまり才助に他ならない。

(11) 山村昌永前掲書大槻玄沢筆の序文による。(翻字)

(12) 大槻如電著『大槻磐水』によれば「玄沢の門人帳に名をつらねるもの、およそ百余人。その中であって、世に大利益を与え、学を天下後世に伝えたものは、稲村三伯・山村才助・橋本宗吉・宇田川玄真の四人とす。われ常に目して、これを磐水の四天王と称す」とある。(二八頁)

(13) 山村昌永前掲書大槻玄沢筆の序文

(14) 杉田玄白前掲書下巻

(15) 一六二三年(天啓三年、わが元和九年)北京版のものが現存する最古のもので、叢書『天学初函』に収められた。職方とは周代に全国九州の地図を掌った官名で、領内各地からの貢物を扱った。職方外とは、職方官支配外の地を云う。因みに

『職方外紀』は中国における近代地理学の先駆となり、わが国にも早くから伝わったが、一六三〇年(寛永七年)に禁書となり、一七二〇年(享保五年)に解禁となった。しかし長崎の人西川如見は既に一六九五年(元禄八年)『華夷通商考』二巻二冊を著した。それは、日本人の手に成って出版された海外地誌・商業地理書として、わが国最初のものであるが、後に一七〇八年(宝永五年)これを増補して『増華夷通商考』五巻五冊を著した。それは元禄版に巻の五「外夷増録」を附加したものであるが、その部分は『職方外紀』を資料としたことが、両書の比較において明らかに窺われる。特に本書はわが国における地理書として、最初にアメリカ州を取り扱ったものとしても画期的なものであった。次いで、才助に先立って、森島中良も一七八七年(天明七年)『西洋雑話』五巻五冊及び一七八九年(寛政元年)『万国新話』五巻五冊の執筆に当って、秘かに『職方外紀』を引用した形跡がある。

その他、大槻玄沢(『環海異聞』・『銃砲起原考』)、司馬江漢(『春波樓筆記』)、桂川国瑞(『漂流御覽之記附北槎聞略』)、近藤正斎(『外藩通書』・『辺要分界図考』)等才助周辺の学者・文人たちの多くも、『職方外紀』を入手又は伝写して引用した。

(16) 新井白石も又、『采覧異言』(一七一三年・正徳三年)執筆に当り、これを用いている。

(17) 才助はその後柴野栗山の奨めでその一部を幕府に献呈するため、更に学友杉田伯元(紫石)に校正と序文を頼んだ。それは翌一八〇三年(享和三年)のことであった。今日の伝写本は大方、この時のものである。

(18) 才助の『異言』引用書目によれば、『万国航海図説』和蘭婦人ピィテル・ゴオス(Peter Goos)撰、図およそ四十一扇」とある。一六七六年アムステルダムで刊行された地図帖。

(19) 右の引用書目によれば、『万国伝信紀事』入爾馬泥亜(ゼルマニア)国学士ヨハン・ヒブネルス(Johan Hubner)撰、上下二編。和蘭国翻訳行」とある。一七三二年にライデンで刊行された蘭訳本で、当時蘭学者たちが、『コーラント・トルコ』と云って、大いに利用した一種の簡易百科事典。

(20) 白石が『西洋紀聞』を書いたのは普通一七一五年(正徳五年)とされている。しかるに「是歲乙丑の年を去ること、一千七百九年」とあるのは、前年即ち宝永五年上陸、捕われたシドッチが白石と対面、取り調べを受けた年に当る。而してこの年は、本書の草稿となったとされる白石の『ヨハンバッティスタ物語』が著された年でもある。但し、一千七百九年が乙丑の年とするのは明らかに間違いで、巳丑の年である。尚キリストの生年即ち西紀元年が第十代崇神天皇三十年辛酉とするの

も、第十一代垂仁天皇三十年辛酉の誤りである。白石は『ヨハンバッティスタ物語』の誤ちを、『西洋紀聞』でも踏襲したのであった。

(21) 『磐水存響』乾七頁、坤七六頁

(22) 大久保氏著『日本近代史学史』一六二—二頁

(23) 信淵の云う「四大帝王沿革の大略」と云うのも、才助の『西洋雜記』卷一中にある「西洋古今四大君の説」に拠ったものである。因みに四大帝王とは、罷鼻落你亞(バビロニア)・百見西亞(バルシア)・厄勤察亞(ギリシア)・羅馬(ローマ)のことである。

(24) 信淵は本書で欧州諸国を帝爵の国と王国に分ち、前者に入爾馬泥亞・魯西亞・都見格を挙げ、王国には仏郎察以下十国としているが、この分け方は既に朽木昌綱が『泰西輿地図説』で分類した処であった。

(25) 私蔵のものは、一八五九年(安政六年) 神保全節所蔵本の伝写本である。

(26) 大久保氏著『鎖国時代日本人の海外知識』四二七頁

(27) 大久保氏著『日本近代史学史』一七六頁